

フォンテーヌブロー宮殿と庭園

～フォンテーヌブローの森を描いたバルビゾン派の画家たち～

ミレーの『^{おちぼ}落穂拾い』と『^{ばんしょう}晩鐘』



フォンテーヌブロー宮殿

フォンテーヌブロー宮殿は、パリの南東約 60km に位置し、イル・ド・フランスの観光地として人気を博しています。パリ・リヨン駅から 1 時間足らずでフォンテーヌブロー・アポン・エイボン駅に到着。駅前から出発するバスに乗り、約 20 分で着きます。

このルネサンス様式の宮殿は、イタリア遠征中にルネサンス美術に魅了されたフランソワ 1 世によって、16 世紀に建造されました。1981 年に世界遺産に登録され、登録基準は (ii) と (vi)。マニエリスム様式の傑作とされる「フランソワ 1 世の^{かいろう}回廊」は、必見です。



『フランソワ 1 世の肖像』

1535 年頃、ジャン・クルーエノルーヴル美術館



『ガブリエル・デストレとその妹』

1594 年頃、作者不明/ルーヴル美術館

フランソワ 1 世の存在無しに、フランス絵画の歴史を語ることはできません。彼は、レオナルド・ダ・ヴィンチをフランスへ^{しょうへい}招聘した王です。つまり、フランスへルネサンス美術を持ち込んだ人物なのです。『モナ・リザ』がフランスにあるのは、このことがきっかけです。フォンテーヌブローの地でイタリア・ルネサンス絵画を学んだ画家たちは、後に「フォンテーヌブロー派」と呼ばれるようになりました。ルーヴル美術館に展示されている『ガブリエル・デストレとその妹』（作者不明）は、フォンテーヌブロー派を代表する作品です。マニエリスム様式に区分され、イタリア・ルネサンス絵画の後期とその後のバロック絵画の時代の^{はざま}狭間の作品で、とても不思議な感じのする作風です。ルーヴル美術館のガイドが、この絵画の前でフォンテーヌブロー派について解説している姿をよく見かけます。

その後、バロック、ロココ、新古典主義、ロマン主義、写実主義と時代が進み、画家たちは、時代に制約された題材に窮屈さを感じ始め、戸外の風景に題材を求めようになりました。そして19世紀に入ると、フォンテーヌブローの森のはずれに在るバルビゾン村に、画家たちのコロニーが形成されました。「バルビゾン派」の誕生です。

主なバルビゾン派の画家をまとめましたので、ご覧ください。

画 家	代表作 * 画家の主な題材や特徴
コンスタン・トロワイヨン (1810年～1865年)	小さな群れ (1860年頃) * 牛や羊などの動物を題材にした作品が特徴。
ジュール・デュプレ (1811年～1889年)	かしらうぼく 樫の老木 (1870年頃) * 木々や水辺を描くバルビゾン派らしい作風。
テオドール・ルソー (1812年～1867年)	フォンテーヌブローの森のはずれ～日没 (1848年頃) * 森や牧草地、空など自然そのものを題材とした風景画。
ジャン＝フランソワ・ミレー (1814年～1875年)	落穂拾い (1857年頃)、晩鐘 (1857年頃) * 農民の生活をテーマにした世界的な名画が並ぶ。
シャルル＝フランソワ・ドービニー (1817年～1878年)	オワーズ河畔 (1865年頃) * 水辺や森の風景を得意とする画家の作品。
ジュール・ブルトン (1827年～1906年)	落穂拾い (1854年頃) * はっきりとした大胆な人物描写の傑作を残した。

※カミーユ・コロー (1796年～1875年) は、一般的にバルビゾン派の画家に分類されますが、作品のスタイルが異なるので、上記一覧表から外しました。

バルビゾン派を代表する画家で真っ先に思い浮かぶのは、やはり「ミレー」でしょう。



『落穂拾い』1857年、油彩
オルセー美術館



『晩鐘』1857～1859年、油彩
オルセー美術館

ジャン＝フランソワ・ミレーの代表作の『落穂拾い』と『晩鐘』は、教科書に載っていたこともあり、私でさえ小学生の頃から知っていました。半世紀前のことですが、小学生の誰もが知っている画家は、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミレー、モネ、ゴッホ、ピカソの5人くらいだったのでしょうか。その中でも、ミレーの『落穂拾い』と『晩鐘』は何か心にジーンとくるものがありました。この2作品を初めて観た時(教科書の掲載写真ですが)、日本にはない風景、暗い絵なのに温かみがある、キリスト教っぽい、こってどんなところなのだろう……と、子どもながらに感じ、漠然とヨーロッパへの憧れを抱いたのを覚えています。子どもが感動

する作品と、知識をもった大人が感動する作品は、質が違います。それは、“純粹な感動”なのです。世界中のあらゆる名画の中で、『落穂拾い』と『晩鐘』は、まさに私が“初めて”感動した作品でした。

ミレーの、この2作品やその他の作品は、日本で何度も紹介されています。私は、必ずと言っていいほど、ミレーの作品が展示される企画展には足を運んでいます。バルビゾン派の作品は、木々や湖沼などの風景画や、庶民や農民を描いたものが多く、宗教画や宮廷絵画ではないので、気軽な感じで作品を鑑賞しています。展示室の照明は暗く、バルビゾン派の作品に溶け込むような演出がなされていて、とても鑑賞しやすい空間を作り上げています。しんとした静かな室内で、長椅子に腰掛けての作品鑑賞。この雰囲気、何ともたまりません。

さて、『落穂拾い』と『晩鐘』の2作品を簡単に解説させていただきます。

『落穂拾い』は、実際には、昼間の作品、『晩鐘』は夕景の作品です。

この2作品の共通点は、画面に占める空と大地の比率が3：7であること、舞台設定が畑で農民が何かをしていること、そして、遠くまで続く農村風景を描いていること、です。違いは、描かれた時間帯と光の加減。『落穂拾い』は、晴れと曇りの中間の空で、雲が描かれていません。雲は“躍動感の象徴”です。それを描かずに、“落ち着き”を表現しています。人物は、3人とも下を向いていて、表情が分かりません。人物だけ見ると暗い感じがしますが、背景は爽やかな色調で描かれているため、バランスが保たれています。

一方、『晩鐘』は、雲や光が描かれていて、それに加え、夕方の逆光がドラマティックな躍動感と美しさを醸し出しています。そして、立ち姿で祈る農民の姿。つらい農作業の後、祈りを捧げると、天から光が差し込み、1日が報われる……そんな感じのする作品です。

『羊飼いの少女』も同様、逆光の効果を上手に取り入れています。

そして、明るい画面構成の作品も描いています。グリーン系の色調が特徴的で、他のバルビゾン派の画家と違い、明るいのです。人物に丸みを持たせたり、色彩のコントラストをはっきりさせたりしています。

『馬鈴薯植え』や『農村の少女』などは、明るく、牧歌的です。風景画の『春』も、明るい画面構成の代表作と言えるでしょう。



ジャン=フランソワ・ミレー
(1814年~1875年)



『羊飼いの少女』1863年、油彩
オルセー美術館



『馬鈴薯植え』1861年頃、油彩
ボストン美術館



『農村の少女(羊飼いの娘)』
1870~73年頃、油彩、ボストン美術館



『春』1868~1873年頃、油彩
オルセー美術館

画家たちがバルビゾン村やその周辺で描くようになったのは、1830年頃からです。最初に関心を持ち始めたのは、カミーユ・コローです。その後、テオドール・ルソー、ミレー、コンスタン・トロワイヨン、ジュ

ル・デュプレ、シャルル＝フランソワ・ドービニー、ジュール・ブルトンなどが何度も訪れ、移住する画家もいました。19世紀半ばにその全盛を迎えます。画家たちが描いた代表作はすべて、バルビゾン村を描いたのかというと、そうではなく、周辺のフォンテーヌブローの森を中心に、その題材を求めました。ルソーやドービニーなどは水辺の風景を多く描いていますが、バルビゾン村には、実のところ、水辺の景観はありません。画家たちには、“自然や農民、庶民の生活を描く”という共通のテーマがありました。その括りで「バルビゾン派」と呼ぶのだと、私は解釈しています。

フォンテーヌブロー宮殿からバルビゾン村までは、約8kmほどです。観光客は、この2カ所がセットになったパリからのオプション・ツアーに参加したり、フォンテーヌブロー・アポン・エイボン駅からレンタ・サイクルで周ったりしています。私は両方とも経験しています。学生時代は、レンタ・サイクルでフォンテーヌブローの森を突っ切って、バルビゾン村へ行きました。車もほとんど通らず、一直線の道を猛スピードで走ったのを覚えています。とても爽快な気分になりました。バルビゾン村は、意外にも、それほど観光地化されていません。19世紀の街並みや風景が残っており、とても閑静な感じのする村です。良くも悪くも、なんの変哲もない普通の農村……というのが、初めて訪れた時の印象です。しかしながら、ここが、あの『落穂拾い』と『晩鐘』の描かれた所なのか、と胸に熱いものが込み上げてきました。ちなみに、実際に描かれた場所は、バルビゾン村周辺のシャイイ・アン・ビエールのです。バルビゾン美術館も見学しました。美術館といっても、若い画家たちの面倒を見た「ガンヌおじさん」の旅籠を改築した小さい建物です。バルビゾン派の画家たちの若い頃の作品が所狭しに展示されていて、当時、同世代だった私にとっては、とても感銘を受けるものでした。美術館には1時間位、いたと思います。パリからのオプション・ツアーですと、要所を効率良く見て周れるのですが、時間の自由が利くレンタ・サイクルの方が、私には向いていました。

現代に続くフランス絵画の歴史は、フランソワ1世がレオナルド・ダ・ヴィンチを招聘したことに始まり、フォンテーヌブロー宮殿が建築されて文化活動が活気づき、後の時代にバルビゾン村に画家たちが集いました。そして、バルビゾン派の画家たちから遅れること約20年、このフォンテーヌブローの地にふたたび、今度は別のタイプの画家たちがコロニーを作り始めました。それが、次の時代を担う印象派の画家たちです。

世界遺産『フォンテーヌブロー宮殿と庭園』の存在が、「バルビゾン派」と「印象派」の誕生のきっかけとなりました。この地は「フォンテーヌブローの森」と呼ばれています。緑豊かな木々、水辺、動物、山の無い平坦な田畑と風の流れる牧草地、それに続く森……、そして、日々の生活を営む農民や庶民たち。画家たちは解き放たれたかのように自分らしい作品を描き始め、数々の名画が誕生しました。

世界遺産『フォンテーヌブロー宮殿と庭園』は、「フランス絵画発祥の地」と言っても、過言ではありません。



沼田政弘